

3 ハンナ型間質性膀胱炎に対して 漢方治療が奏功した1例

函館五稜郭病院泌尿器科

高橋 敦、松木 雅裕、太刀川 公人、栗栖 知世
伊藤 悠、高木 良雄

緒言：間質性膀胱炎に対する薬物療法としてエビデンスの高い薬剤は少ないが、この中に漢方薬が含まれる。今回、ハンナ型間質性膀胱炎に対して漢方薬治療が奏功した症例を経験したので報告する。

症例：30歳台、女性

主訴：頻尿、膀胱痛（蓄尿時）

現病歴：201x年6月より、排尿痛、頻尿、残尿感が出現した。急性膀胱炎として抗菌薬投与するも改善なく、頻尿も持続、さらに蓄尿時の痛みも出現したため、精査目的にて当科紹介され受診した。膀胱鏡を施行したところ、ハンナ潰瘍を疑う所見を認めた。

現症：身長161cm、体重72.6Kg、尿検査ではWBC30WBC30-40/hpf、RBC30RBC30-40/hpf、便通は1日1回で正常、体格はがっちりしており、顔色は血色良好でやや赤みがある。足の冷えあり。舌診：淡紅色、薄い白苔、舌下静脈拡張あり。脈診：浮沈中間。腹診：腹力4/5（やや実）、胸脇苦満なし、腹直筋緊張なし、臍上悸なし、臍傍に圧痛あり。

経過：201x年8月膀胱水圧拡張療法+膀胱生検を施行した。ハンナ潰瘍に加えて、水圧拡張後には五月雨状出血、筋層におよぶ亀裂を認めハンナ型間質性膀胱炎と診断した。退院後は頻尿の改善をやや認めたが、膀胱痛は改善しなかった。薬物治療としてまずトシル酸スプラタストを投与したが、全く効果がないため、猪苓湯、桂枝茯苓丸を追加処方した。1か月後には膀胱痛が軽減し（最初を10とすると1ぐらい）、鎮痛薬を服用しなくても良くなった。3か月目には桂枝茯苓丸を中止するも症状の増悪を認めなかった。その後、自己判断で全ての薬剤を中止したところ、中止1か月後には膀胱痛が再出現した。トシル酸スプラタスト、猪苓湯を再開しすぐに症状改善を認めたが、2か月後には膀胱痛が増悪した。そのため、桂枝茯苓丸を追加したところ2週間後には膀胱痛を含め症状は消失した。それ以降、3剤併用で継続しており症状の増悪を認めていなかった。201x+2年10月トシル酸スプラタストを中止し、4月桂枝茯苓丸中止するも膀胱痛の再発を認めなかった。9月猪苓湯を中止したところ、2週間後から自覚症状の再発を認め、猪苓湯、桂枝茯苓丸を再開しすぐに膀胱痛が消失した。201x+3年2月猪苓湯のみとし、9月で猪苓湯を廃薬した。1年3か月経過した時点で再発を認めていない。

結語：ハンナ型間質性膀胱炎に対して漢方薬治療（猪苓湯、桂枝茯苓丸）が効果を示す可能性が示唆された。